

教職支援室便り (1月号)

令和5年 1月 13日 (金)

文責：教職支援室 曾我文敏

☎0985-20-4808

卒業、そして教職に就く皆さんへ

1月に入り、新しい年がスタートしました。卒業される学生の皆さんは、いよいよ3月には卒業式を迎えます。また、教職に就く皆さんにとっては、赴任する学校を知らせる通知を待つばかりです。今の心境は、教職への希望と不安が錯綜して複雑でしょう。確かに、教員の業務には厳しいものがあります。学習指導や生徒指導、学校行事や地域での活動など、多くの業務の中で、大変な仕事だと感じることがあります。しかし、教職をやりがいのある仕事だと、実感することも多くあります。宮崎公立大学の卒業生としての誇りをもち、これからの教職人生を、素晴らしいものにしてください。



そこで1月号、2月号、3月号では、教職に就く皆さん、また今後教職をめざす皆さんへの、卒業生からのエールを紹介します。今回は、佐賀県唐津市立西唐津小学校の内田笑里さんに寄稿していただきました。お忙しい中、本当にありがとうございました。心から感謝いたします。

令和2年3月卒業
佐賀県唐津市立西唐津小学校 内田笑里さん

宮崎公立大学の皆さん、こんにちは。私は、宮崎公立大学をほんの数年前に卒業して、現在地元の小学校に勤めている内田笑里と申します。これを聞くと驚かれるかもしれませんが、私は大学生になるまで「先生になりたい!」と思ったことは、一度もありませんでした。むしろ別の道を目指して宮崎公立大学に入学しました。もともと英語を勉強することが大好きで、英語を使った仕事に就きたいという志をもっていました。そこで、英語を使う仕事の一つに「英語教師」という道もあることに気づき、大学では保険のような感覚で教員免許を取得するために講義を受けていました。この時点ではあくまで“保険”なので、本当になりたいと思って勉強していません。しかし、教育の勉強を進めるうちに、「面白い」「実際に現場で働くのって楽しそうだな」「先生って大変そうだけどやってみたいな」と思うようになりました。そして、宮崎公立大学では、英語の教員免許だけでなく、通信で勉強すれば小学校の免許も取得できます。大学2年生のときに、「英語の免許を取るなら、ついでに小学校の免許も取って将来の選択肢を増やそう」という軽い気持ちで、小学校の教員免許も取得しよう決めました。そして、教員免許を取得するために実習で、小学校・中学校の母校を訪れた際に、「自分には小学校の先生が向いているかも」と思い、小学校の先生になりたいという気持ちが、徐々に強くなっていきました。しかし、英語の勉強も大好きなので、海外で働くことも諦めきれませんでした。そこで、私に決心させたのが、今なお大流行中の“新型コロナウイルス”です。卒業後、海外へ行くことが決まっていたのですが、コロナウイルスの影響により出発が半年ほど延び、その期間で教員採用試験が受けられるようになりました。採用試験を受けると心に決めてからは、勉強を始めたのが周りよりも遅れていましたが、だからこそ毎日こつこつと頑張りました。卒業したにも関わらず、曾我先生をはじめ多くの先生方にお世話になり、そのおかげで合格を手にすることができました。

(次頁に続く)

小学校教員として働く今、この仕事を目指して良かったと心から思います。楽しいことばかりではなく、生徒指導や学力向上のための日々の授業など、思い悩むことは多くありますが、子どもたちに支えられながら、笑顔で過ごすことができている。子どもたちの成長を見守ることで、私自身も学ぶことができます。「先生ありがとう」や「先生のお陰で分かるようになりました」という言葉を貰ったり、困っていたら助けてくれたりする優しい子どもたちに囲まれて、幸せだなと感じる瞬間が多くあります。それに比例して、大変なこと（子どもたち同士の喧嘩や保護者対応など）も多くありますが、子どもたちの一生懸命な姿を見ると、「自分も頑張らないとな」と自然と思えます。

「先生」として働くことは決して楽なことではありませんが、自分自身も子どもたちと一緒に成長できるやりがいのある仕事です。終わりのない採用試験の勉強も先生になるための第一歩だと思って、最後まで諦めず頑張ってください。応援しています。

教員採用選考試験英語科合格者数（九州各県）

採用年度		令和5年度	令和4年度	令和3年度	令和2年度	令和元年度	30年度
宮崎	中	11	11	10	15	11	11
	高	6	7	2	6	3	6
沖縄	中	15	12	14	15	15	17
	高	6	4	7	7	5	4
鹿児島	中	25	20	20	20	18	15
	高	4	3	3	3	4	3
大分	中	18	20	20	22	22	12
	高	4	3	10	6	9	6
熊本	中	15	13	11	13	12	14
	高	7	3	2	2	3	2
長崎	中	16	11	14	14	12	9
	高	10	9	8	7	5	5
佐賀	中	13	20	17	14	14	10
	高	3	5	5	4	4	7
福岡	中	66	52	49	36	40	46
	高	18	16	18	27	32	22

現在、教員採用選考試験においては、小学校教員の採用者数が全国的に多い一方で、中学校英語、高等学校英語については、受験者の減少傾向はあるものの、本資料の合格者数からも、依然厳しい状況にあると言えます。また、大学生の皆さんにとっては、学校現場で勤務している、臨時的任用講師等の先生方との競争試験であることから、本当に狭き門であると考えます。

本学では、教員採用選考試験に向けて「教職特別講座」を行っています。学生の皆さんの自助努力も不可欠であり、英語力を磨くこと、向上させることは、合格への必須要件です。トイック730点以上、英語検定試験準1級以上等の資格取得に向けて、積極的に英語力向上に取り組んでほしいと思います。更には、教職教養に関する知識を習得、活用して、教育問題に対する自己の考えを、十分に表現する力を身に付けなければなりません。教職教養の演習で培われる力は、一次試験「筆記試験」だけではなく、二次試験「面接、集団討論、グループワーク、小論」などにも大きく影響します。

大切なことは、一次試験に向けて、意図的・計画的に、誠実に「教職特別講座」の演習に取り組むとともに、自分で工夫しながら勉強を進めていくことです。担当者としては、学生の皆さんのあらゆるニーズに応えていきたいと思いますが、各自「主体性」をもった取組が重要です。1年の間には、壁にぶつかることもあると思いますが、問題意識・課題意識をもって、粘り強く取り組んでほしいと思います。私も学生の皆さんと、充実した1年を過ごしたいです。

教職課程履修者対象座談会

昨年12月20日（火）、教職課程履修者対象座談会（参加者31名）が行われました。座談会は、グループ別協議で進められ、参加者の皆さんは有意義な時間を共有していました。各グループでは、教員採用選考試験、教職特別講座、教育実習など、様々な質問が出されましたが、助言者として参加していた4年生が、体験を踏まえて丁寧に回答していました。



今回の会を通して感じたことは、学生の皆さん相互の交流、また教職課程の先生方と学生の皆さんの交流の重要性です。また、今回も1年生、2年生の参加者が少ない状況を踏まえ、彼らへの支援が課題であると、改めて認識しました。教職支援室担当者としては、学生の皆さんの様々なニーズに応えられるよう、日頃から準備をしています。現在の学校教育の現状を踏まえると、教職を目指す人材を大切に育てることが、本学の教職課程の重要な責務であると捉えています。担当者として、さらに多くの学生の皆さんへ、支援を拡大していきたいと強く思います。

次に、本会に参加した学生の皆さんの、感想の一部を紹介します。

<2年生、3年生>

- ◇ 今後の試験対策の方法が明確になり、受験まで時間がないことを改めて認識できました。
- ◇ 先輩方から話を聞いて良かったです。少し、不安が取り除けました。
- ◇ 講話などよりも先輩を近くに感じたし、実習の話聞いてよかったです。
- ◇ 実際に教員として働いたことのある人に、自由に質問できる時間もほしいです。

<4年生>

- ◇ 3年生が悩んでいることを聞いて、自分も同じことを悩んでいたと思いました。3年生の役に立っていたら嬉しいです。
- ◇ 同じ目標を持った後輩と話せて楽しかったです。また、こういう機会があるといいです。
- ◇ 後輩達が悩んでいることは自分も悩んでいたことだったので、お話をしたのですが、ほっとした顔をしていたので良かったです。不安を取り除く材料になれたのかと嬉しく思いました。普段関わらない後輩にも、たくさん会えて良い機会でした。

道徳の教科化に思う！（シリーズ68）

平成29年の6月号から、「道徳の教科化に思う」をテーマに、道徳授業の本質的な在り方等について連載しています。

今回は、「道徳科における発問を考える」をテーマに、その1として「道徳科における補助発問の重要性」についてまとめました。

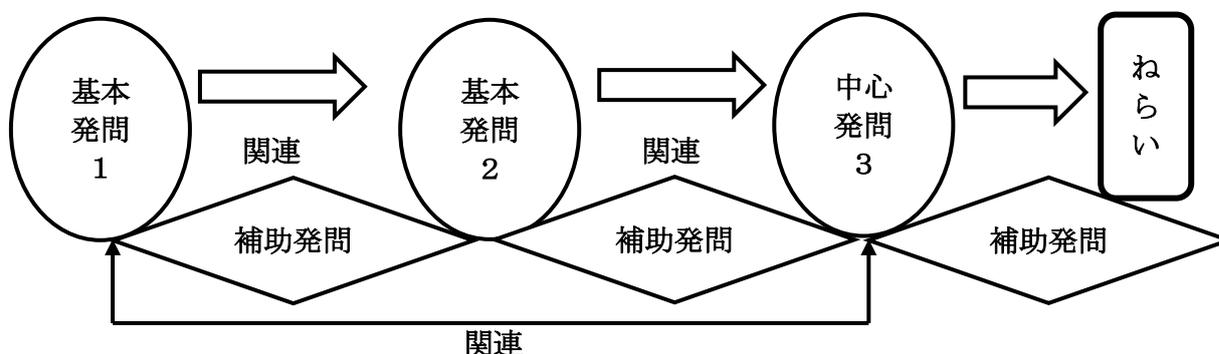
◇ 道徳科における補助発問の重要性

道徳科の授業においては、「ねらい」に迫るための、「シナリオ」のある発問構成が求められる。「シナリオ」のある発問構成とは、授業者の明確な指導構想（指導の意図）のもとに、導入から終末までの流れ（「ねらい」に迫るプロセス）に連続性をもたせる、緻密な発問を構成することである。そのために授業者は、ひとつひとつの発問の意図を明確にして、発問を相互に関連させながら、「ねらい」への迫りを構想しなければならない。そこには、児童生徒の思考の流れや反応を予想する、授業者の力が重要となる。

さて、道徳科の授業では、基本発問を軸に発問が構成される。そして、基本発問の中で、「ねらい」に迫るために重要な発問が中心発問とされる。しかし、基本発問と中心発問だけでは、「ねらい」に迫ることはできない。補助発問が重要となる。それは、補助発問により、基本発問や中心発問が効果的なものになったり、それらが相互に関連性をもったりするなど、「ねらい」に迫る発問が構成されるからである。ゆえに、この補助発問は、授業者の教材分析力を表すもの（評価するもの）と言っても過言ではない。（下欄図参照）

<発問構成概図（例）>

導入 ————— 展開前段 ————— 展開後段・終末



また、補助発問は基本発問を支えながら、心を揺さぶり自己を語らせたり、価値を把握させたりする上で効果を発揮する。

○ 心を揺さぶり、自己を語らせる補助発問

価値を実現できない（しようとしな）主人公の姿、思い悩む主人公の姿を通して、児童生徒の心を揺さぶり、自己を語らせる中で多様な考えを引き出し、人間としての「弱さ」に気付かせる。主人公の生き方を、自分との関わりの中で考えさせることにより、児童生徒に主人公への強い共感を引き出す。また、その中で、道徳的価値を多面的・多角的に考える力を育てる。

【補助発問例】

- ・「人には皆、そのような弱さがあるのでしょうか。」
- ・「そんなことでよいのでしょうか。」
- ・「人として、あまりに寂しいことではないですか。」
- ・「主人公を許してやることはできませんか。」
- ・「主人公の考えについて、あなたはどのように思いますか。」

○ 価値を把握させる補助発問

価値を実現できる（しようとする）主人公の姿を通して、児童生徒に人間尊重の精神に基づいた価値観に気付かせ、人間としての「強さ」を感得させる。ねらいとする価値を把握させる中で、その価値を多面的・多角的に考える力を育てる。

【補助発問例】

- ・「主人公をそこまで突き動かしたのは、何だったのでしょうか。」
- ・「主人公の心の底には、どんな気持ちや考えがあったのでしょうか。」
- ・「主人公からどんなことを学びましたか。」
- ・「人はそこまで強くなれるものなのでしょうか。」
- ・「(例・誠実に生きる)とは、どのようなことなのでしょうか。」

このように、補助発問は基本発問を支えながら、心を揺さぶり自己を語らせたり、価値を把握させたりする上で効果的であり、主人公の言動を自分との関わりの中で考えさせたり、多面的・多角的に考えさせたりすることができる。そして、価値理解、人間理解、他者理解に重要な役割を果たすのである。

学習指導案検討会や授業研究会等においては、基本発問に関心が集まりがちであるが、補助発問の在り方を注視することは重要である。ただし、充実した教材分析を経ての、補助発問の計画が前提であることは言うまでもない。

今回は、「道徳科における発問を考える」をテーマに、その2として、「ねらいと発問」について掲載する予定です。